

親切の貯金

富岡市立妙義中学校

三年 萩原 ひまわり

「情けは人の為ならず」誰もが一度は聞いたことのある言葉だと思います。私は以前、この言葉を少し冷めた目で見ていました。「人に親切にすれば、それが自分に返ってくる」とは言っても、それが必ず返ってくると約束されているわけでもないし、そんなことをしても自分が損をするばかりだと考えていたからです。そう思うようになったのは、身近に損ばかりしているように見える人がいたからでした。私の祖父です。

私の祖父は、地域の何でも屋のようなことをしています。もちろんプロの職人ではありません。ですが、祖父のところには、沢山の人が、様々なことを頼みに来ます。例えば、「庭の木の剪定をしてほしい」「水道管の調子が悪いから見てみてほしい」「雨樋が壊れてし

まった」など、どんな頼まれごとでも、祖父は何一つ断りません。雪の日に「車がスリップした」と言われれば、スコップを持って真っ先に飛び出していきます。自分の時間を削り、ときには汗だくになって周りの人のために働く。どれだけ大変でも、いい運動になったと言って、笑ってお茶を飲んでいる。そんな祖父をカッコいいと思う反面、心のなかでは、「そんなに頑張っても、なにか見返りがあるわけでもないのに」と少し冷ややかな目で見ていました。そんなとき、ある事件が起こりました。

学校裏で、迎えを待っていたとき。いつもはすぐに迎えに来てくれる祖父ですが、その日は学校が終わってから三十分程度待っても音沙汰がなく、どうしようかと考えていました。すると伯母が迎えに来て、祖父が大怪我をしたというのです。詳しく聞いてみると、家の屋根にペンキを塗っていたところ、足を滑らせ、落ちてしまったとのことでした。足や腰、あばらなど、身体中の骨が折れ、退院までは一ヶ月から二ヶ月程度かかると言われていました。祖父は当時八十歳で、「こ

の年で、こんな大怪我をしては、これからは車椅子での生活になるかもしれない」とお医者さんから言われていました。私はもちろん心配しましたが、一方で「どれだけ頑張って人に感謝されても、自分の生活がままならなくなつては意味がないし、過度な親切を行つても、自分が損をするだけなのに」と、呆れを感じていました。

そんな事を考えていたとき、祖父の具合はどうかと言つて、家にたくさんの人たちが来てくれました。顔をよく見てみると、全員、祖父が以前親切にしてあげていた人たちでした。「あのとき、親切にしてもらつたから今度は私達が助ける番だよ」と言つて、お見舞いをくれたり、「長期間入院するんだからお金がかかるだろう」と言つて、入院費の足しになるようお金をくれるようにしたりしてくれたのです。私はそんな光景を見て、「情けは人の為ならず」という言葉は、こういうことだったんだなと、気づきました。親切がすぐに帰つてこなくても、貯金のように貯めていたものが積みもり積みもつて、大きくなって返ってくるんだなと思いまし

た。

祖父は、一ヶ月程度で退院し、現在は足も治つて、普通に生活しています。お医者さんによると、「たくさん動いていたことにより、骨に適度な負荷がかかり、一般的な八十代よりも骨が強かったこと、また筋肉量も多く、寝込んでいる間に筋肉が落ち、歩けなくなつてしまうこともなく、リハビリもしっかりと行えたからではないか」と言っていました。それを聞いて、祖父が行っていた親切は人から返つて来るもの以外でも、自分のためになつていたんだな、と改めて実感しました。私も祖父のようににはなれなくとも、人のために、自分のために、親切を行えるよう、心がけて日々を歩んでいけたらと思つています。そのために、まずは小さなことからでも実践し、私なりの親切の貯金を積み重ねていきたいです。